

【公募型】 令和3年度 客員研究員 研究報告書

滋賀大学経済経営研究所

氏名	氏名（ふりがな）	所属学科・職名
	石川清英（いしかわ きよひで）	大阪信用金庫管理部上級シニア 龍谷大学大学院、滋賀大学経済学部、神戸学院大学法学部他非常勤講師

期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
調査・研究のテーマ	近畿地区信用金庫の破綻処理終結後の被合併金庫の財務特性分析
研究成果の概要 (中間成果も可)	<p>1. 目的</p> <p>バブル崩壊以降 25 金庫の信用金庫が破綻したが、2003 年頃に破綻処理が終結し、その後信用金庫の破綻は発生していない。この時点で信金業界の危機は収束したように思えるが、その後も信用金庫の合併が多数発生し信金数は減少している。</p> <p>この現象を見ると、後に合併した信金も破綻処理は免れたが、この時期に財務内容の悪化していた信金が存在した可能性がある。すなわち、本来破綻処理すべき信金が存在していた可能性がある。</p> <p>私は先の研究で破綻信用金庫と健全信用金庫の比率財務諸表の時系列分析を行い、破綻10年前においても財務上の差異が見られることを確認した。</p> <p>本研究は、同様の手法で、前研究時点では健全金庫に分類されていたのちに合併された金庫とその後も単独で存続、あるいは合併を行った健全金庫との財務上の差異を分析する。また、同時に破綻処理された金庫と被合併信金との差異も分析する。</p> <p>2. 分析手法</p> <p>・サンプル選択</p> <p>破綻処理終了後に合併された近畿地区の信金を選択 12 金庫のみ 正常金庫は被合併金庫と同一地区の金庫を選定（滋賀県、京都府、大阪府） 同一地区にサンプル候補が多数ある場合は関連のある金庫をサンプルとする。例えば、のちにこの合併金庫と合併した金庫を選択する。 サンプル数に偏りがないように両者を同数とすることとし、その結果、被合併金庫12金庫、健全金庫（存続金庫）12金庫が選択された。</p> <p>・分析手続</p> <p>サンプルとした信金の5年度分の総勘定科目を対象とした比率財務諸表を作成。 健全金庫と被合併金庫の2グループに分け、算出した比率財務の勘定科目ごとのマハラノビス距離（MD）を算出</p>

	<p>焦点を当てるべき比率のスクリーニングを行い、MDの大きい比率につき詳細な分析を加えた</p> <p>3. 分析結果と結論</p> <p>5年間の正常金庫、被合併金庫の比率財務諸表の差異分析を行ったが、両者間には財務内容の健全性に差が認められた。特に、不良債権関連の指標には明らかな差があった。また、自己資本比率にも差があり被合併金庫は自己資本が脆弱で、単体では、将来存続の危機を抱えていたといえる。</p> <p>なお、破綻金庫にみられた顕著な特徴であった債務保証や預貸率の高さは、被合併金庫には特に見られなかった。ただし、出資金については年毎に増加傾向を示しており、破綻金庫同様自己資本比率を意識して増加を図った可能性がある。</p> <p>また、破綻金庫と被合併金庫についても同様の分析を行ったが、破綻金庫と正常金庫との分析結果と大差なかった。</p> <p>以上より、今回分析対象とした近畿地区の被合併金庫は財務内容に問題を抱えているものの、当時破綻処理された信用金庫とはそのレベルが異なることも明らかとなった。</p> <p>4. 課題</p> <p>今後全国ベースで同様の分析を行いたい。また、線形判別関数による多変量解析も行いたい。</p>
<p>研究成果発表の計画 (学会報告及び学術誌への投稿)</p>	<p>日本リスクマネジメント学会、日本経営企業診断学会などで報告の予定</p>